

## (研究ノート) 蓑虫山人とゆかりの人々

太田原慶子<sup>1)</sup>

Artistic interactions of Minomushi Sanjin

Keiko OAHARA

キーワード 蓑虫山人 成田コレクション 平尾魯仙 佐藤蒨 書画会 奥村準作 廣澤安任

### はじめに

蓑虫山人(みのむしさんじん、本名=土岐源吾 1836-1900年、蓑虫山人、六十六庵主などともいう)は、美濃(現在の岐阜県)に生まれ、幕末から明治期にかけて九州から本県まで全国各地を旅した画人である。各地の素封家を訪ね歩き、滞在先での出来事や人々の様子を描き記録した。晩年、旅先で収集した資料などを紹介する博物館「六十六庵」を故郷に建設する夢を描いていたが、果たすことができなかった。

青森県立郷土館では、昭和59年(1984)に特別展「蓑虫山人」、平成20年(2008)に企画展「蓑虫山人と青森」を開催した。後者は、青森県内での滞在記録(絵日記)である「蓑虫山人写画」<sup>2)</sup>と、見聞、収集した土器石器類をスケッチし、出土地や所蔵者を付記した「陸奥全国神代石并古陶之図」<sup>3)</sup>を中心に本県考古学史との関わりを探った。その後、様々な方面から貴重な資料や情報が寄せられ、研究も進められてきたが、今年度、廣澤安任(ひろさわやすと 1830-91年 現三沢市谷地頭に初の民間洋式牧場を開設)との交流を確認できる資料について知る機会を得た。平成20年の企画展後、館所蔵となった作品、提供された情報等から、蓑虫との交流のあった人々について整理してみたい。

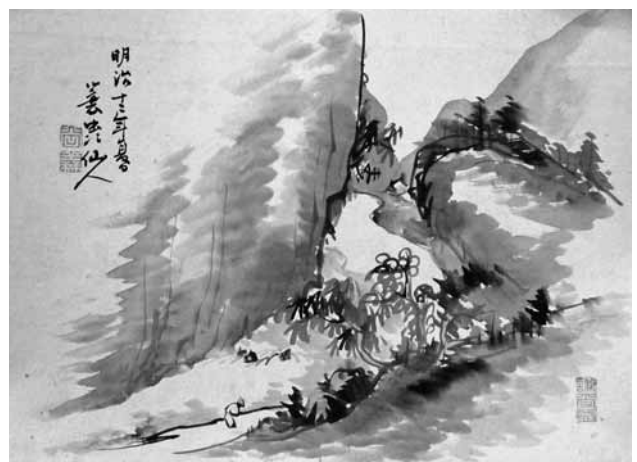
### 蓑虫と平尾魯仙(図①・②・③)

蓑虫は、明治11年(1878)には青森県に入り、翌12年には弘前の画人で国学者の平尾魯仙(ひらおろせん 1808-1880年)に会っている(2008年図録「蓑虫山人と青森」5頁参照:魯仙筆『考古図』によると、蓑虫は「美濃の画人」として魯仙を訪ねている)。

平成23年(2011)に県立郷土館に寄贈された成田コレクションに、蓑虫と魯仙の弟子達との交流をうかがわせる作品が含まれていた(図①・②)。このコレクションは、魯仙の弟子の佐藤蒨(さとうしとみ 1852-1944年 歴史、植物学者 考古資料を描いた「考古図譜」や植物画がある)の収集資料を引き継いだ青森市の医師成田彦栄氏(1898-1959年)のコレクションである<sup>4)</sup>。成田氏は蓑虫の優れた研究者であり、その作品収集なども積極的に行っていた<sup>5)</sup>。

図①は、蒨が収集した師匠格、同僚達の作品中に含まれており(紙の寸法が27.5×37cmではほぼ同一、裏打ちされた状態であることなどから後に「画帖」にまとめられる予定であったとも考えられている)<sup>6)</sup>、このことは、蓑虫が画人として、魯仙門下に受け入れられていたことを物語るのではなかろうか。

さらに、魯仙は、博物学的にも多くの貴重な記録を残し明治13年に没するが、その直前に魯仙に会い、さらに蒨ら優れた弟子達と画人としての交流の機会を得たことは、蓑虫に描く自信を深めさせただろう。魯仙には、暗門の滝(西目屋村)を描いた「暗門瀑布紀行」(明治9年)<sup>7)</sup>などがあることから、「暗門山三面瀑布之図」(図③)は、そうした交流の中で描かれたものかもしれない。



図①「山水」紙本淡彩 明治12年

### 蓑虫と奥村準作

「蓑虫山人写画」には、彼が収集した資料や描いた作品の展示会(展覧会、書画会)を開いている場面がある。展

### 註)

1) 青森県立郷土館 主任学芸主査(〒030-0802 青森市本町二丁目8-14)

示物や人名、場所、日時などが細かく記載され、また、詰めかけた人々に得意げに説明する蓑虫本人が描かれる。当時の書画会の状況を考えるうえでたいへん貴重な資料である<sup>8)</sup>。

『東京人類学会報告2-16 1887年』で神田孝平(かんだたかひら1830-98年 洋学者、政治家 考古学にも造詣が深く、東京人類学会初代会長)が蓑虫の書簡を報告した「陸奥瓶岡ニテ未曾有ノ発見」一連の記事によると、明治20年(1887)5月に青森で展覧会を開き、自身が所蔵する「古物を公衆に示した」とある。この時、蓑虫とともに展覧会を開いたのは、青森市浜町の骨董商奥村準作(おくむらじゅんさく 1841-1915年)で<sup>5)</sup>、『青森市沿革史』や『青森市史』(第5巻産業編 1982年)によると、「書画骨董場」を開き、明治19年(1888)に青森市浜町に「勤工場」を設置した発起人の一人でもある。

奥村準作は、廣澤安任とも交流があったようで、書画骨董を陳列し売買する場所を設置するにあたり諸々相談したらしく、廣澤からは津軽地方の石器や土器をとりまとめ、蓑虫と展覧会を開くよう勤める返書があったという。廣澤はさらに東京の神田孝平に話を通し、展覧会には神田も来青するはずだったが都合がつかず、このときは実現しなかったらしい<sup>9)</sup>。

### 蓑虫と廣澤安任

蓑虫と廣澤安任の接点を示唆する記載は、これまでもあったが(郷土館図録『蓑虫山人』1984年)、やりとりの詳細は知られていなかった。今年度、廣澤の末裔である廣澤春任氏から、興味深い資料の情報を得た。廣澤安任が、蓑虫とのやりとりを記した自筆草稿の存在である。春任氏によると、その内容は次のようなものである<sup>10)</sup>。

「客冬予弘前ニ至ル途ニ仙人ヲ浪岡ニ訪フ。仙人曰ク、吾ハ十四歳ヨリ出游シ足跡殆ト六十州ニ治シ。弘前ハ古器ノ出ル所、料ラスモ八ケ年ノ寒暑ヲ経タリ。ソノ間自ラ諸賢ノ累ヲ為セシ多キヲ知ル事多シ。人ノ累ヲ為スハ好ム所ニ非サリシモ亦已ムヲ得サルナリ。因リテ明春ヲ以テタヒ辞シテ此地ヲ去ラントス。去ルニ臨ミテハ発見スル所ノ器物ヲ展覧ニ供シ、一ハ以テ吾カ多年嗜好此ニ過サルヲ明ニシ、一ハ以テ永滞ノ間諸賢ノ眷顧ヲ辱セシ厚意ニ謝セントス。願ハクハ君吾ニ代テ予意ヲ記セヨ云々…」

この中で、廣澤は蓑虫のことを「仙人」と呼び、弘前に行く途中に浪岡の蓑虫を訪ね、蓑虫から、8年も弘前で過ごしてしまったが、来春当地を離れる前に自身が発見した「古物」を展覧したい、(そこで)自分に代わって展覧会を開く主旨を廣澤に書いてほしいと依頼している。これにより、蓑虫と廣澤が直接会い、このとき、展覧会を開きたいという蓑虫の気持ちを受けて「会記」を記すことになったということがわかる。ただ、この草稿には年月日までは記されておらず、また、展覧会をどこで開こうとしていたのかについても不明だが、内容からすると場所はやはり弘前周辺と考えるのが妥当かと思われる。

それでは、廣澤が蓑虫と接点を持ったのはいつのことか。これには、神田孝平の奥羽巡回(明治19年)が関係してくると考えられる。「奥羽巡回報告」(『東京人類学会報告』2-11 1887年)、さらに彼が弘前の下澤保躬(しもざわやすみ 1836-96年 国学者、歴史家、歌人)にあてた書簡<sup>11)</sup>によると、神田は同年7月半ばに東京を発ち、8月末に帰京しており、佐藤蔭、蓑虫、廣澤の順に訪ねている。このことから、廣澤が浪岡に蓑虫という人物がいると知ったのは、神田の来訪時(明治19年夏)のことであって、神田からの情報を得てこの年の冬、蓑虫を訪ねた。そして、蓑虫が翌年春に本県を離れる前に開く展覧会の「会記」を記すことができよう。

### おわりに

生涯の大半を旅に費やした蓑虫が、青森県内に長く滞在した(明治20年に上京し青森を離れるが、その後も来青している)のは、やはり「古器」が多く出土するた



図②岩木山之景 紙本淡彩 45×61.5cm



図③「暗門山三面瀑布之図」  
紙本淡彩 一幅  
216×46.5cm

め、そして彼が多くの魅力的な人々に出会い、知識を得、交流を深めたことであることを、今回新しく提示された廣澤安任の草稿は裏付けるものであり、蓑虫と廣澤の接点を示す具体的な資料として貴重なものである。また、本県に入って間もなく、平尾魯仙周辺の人々に画人として受け入れられ、交流を持ったことは、その後の活動に影響を与えていった。蓑虫と交流をもった人々は、当時の文化人、各地の有力者たちであり、その状況を確認していくことは、本県明治期の文化を知る手がかりとなる。さらに、現在所在不明になっている蓑虫の収集資料を追い、また現存するものを確実に残すために必要なことだろう。今後も作品調査、資料収集を行って考察を深めていきたい。

#### 謝辞

廣澤春任氏には、情報提供及び資料複写等ご教示いただきました。感謝申し上げます。

#### 註

- 2) 「みのむしさんじんうつしえ」(個人所蔵) 明治15年(1882)前後における絵日記。亀ヶ岡遺跡(つがる市)の発掘の様子なども描かれる。2008年企画展図録『蓑虫山人と青森』参照
- 3) 「むつぜんこくじんたいせきならびにことうのず」(個人所蔵) 150点をこえる土器、石器類が描かれる。前掲2) 図録参照
- 4) 青森県立郷土館展示図録『寄贈記念 成田彦栄コレクション選』2012年
- 5) 成田彦栄「蓑虫山人と考古学」郷土文化4-2 1949年 ほか
- 6) 對馬恵美子「平尾魯仙の落款について」青森県立郷土館研究紀要 第37号 2013年
- 7) 青森県立郷土館特別展図録『平尾魯仙 青森のダ・ヴィンチ』2013年
- 8) 『青森県史 文化財編 美術工芸』197-198頁 2010年
- 9) 奥村準作については、2008年企画展開催中に関係者から私信で参考資料及び情報の提供、ご教示を受けた。
- 10) 廣澤春任『廣澤安任個人史資料探訪』157-164頁 2015年
- 11) 福田友之「下澤保躬の考古学—「東京人類学会報告・雑誌」の記事を中心に—」青森県考古学 第17号 2009年
- 12) 福田友之・福井敏隆「弘前市立図書館所蔵の神田孝平から下澤保躬にあてた書簡—陸奥考古学界草創期の一断面—」弘前大学國史研究第139号 2015年